

第二次世界大戦直後、広島が原爆による壊滅的な被害からの復興に立ち上がり、平和運動や被爆者運動が芽生える過程をつぶさに見ていくと、外国の人々との交流があつたことが分かる。この交流は「ヒロシマ」が世界的に知られる契機となり、また広島においても、原爆被害に対する認識に影響を与えた。本報告では日系アメリカ人、とりわけ貿易業者との関係を事例に、このような交流が広島地域社会でいかなる意味を持っていたかを検討する。それを通じて、被爆都市としての広島を、明治時代以来の出移民の歴史と接合することを試みたい。

【報告者】 川口 悠子
法政大学理工学部准教授

【コメンテーター】 根津 朝彦
立命館大学産業社会学部准教授
法政大学国際日本学研究所客員所員

【司会】 横山 泰子
法政大学理工学部教授
国際日本学研究所長

2021年2月24日(水)14時~15時30分

オンラインにて開催

(オンライン会議システムZoomを使用します)

参加無料

事前申込が必要です

事前申込：<https://forms.gle/8CjMJSjR5Nnskf79>



故郷にとつての移民

― 占領期の広島と在米広島県人の貿易業者